



金色天秤



福田鼠

金色（こんじき）天秤

——その秤は何事をも正確に量る。

装飾は無く、簡潔。

しかして、金色（こんじき）。

鼠がいた。

彼の体は小さく、弱く、他の生物に勝つということをほぼ全くと言って良いほど知らない。

鼠にとって、生きるとは選択の積み重ねであった。一日が始まる、それだけのことで、起きるか起きざるか。鼠の目は開いていても、そのまま体を起こさないという選択は可能である。起きないでいれば、捕りモチにかかって命を落とすと言う危険を避けることもできる。しかし、大抵の場合、鼠は起きるという選択をした。それは必要性に迫られて、つまり、食事の為、起きねば食を得ることはない、食わねば生きてはいけない。起きたとして、右足か、左足か、どちらから踏み出して、どっちに向けて歩くか。食、冷蔵庫の脇のチーズを見つけたとして、食いに行くか、行かないか。

彼は小さく、弱い。彼には限られた選択肢しか与えられない。

彼は全ての選択を彼自身の判断で、彼自身が責任を持って行わなければならない。

唯一、彼が行わなくて良い選択といえば、死ぬか、生きるか。生きている限りは生きているしかない。彼以外の何者か、とても大きな何者かが責任を持って、彼に生きるという選択しか取らせない。

しかし、その日の鼠は疲れ果てていた。

彼はもはや選択を辞めたい、そう考えていた。

このところ、彼の選択はいずれも逆だった。起き上がった日には食にありつけず、起きない日に、友人は甘美な果実を見付け、よし、自分もそいつを食いに行こうと、足を進ませれば、捕りモチに仲間の死体がかかっていて、そいつを大きな生物がつまみ上げ、どこかへと運ぶ。その運ばれていく先を鼠は知らない。しかし、そこはとても暗くて、冷たく、乾いた場所だと鼠は思う。

鼠の選択はことごとくしくじっていた。

鼠の友人に土竜がいる。土竜は目が悪かった。鼠は土竜に優しくかった。時には、食を分けてやることさえあった。鼠は土竜のことを可哀想だと思い、優しく接していた。土竜はそれを嬉しく思った。鼠にとって、自分より弱く、そういう優しさを与えることができる相手といえば土竜くらいしかいなかった。

池の畔で鼠は溜息を付いていた。彼は、その日を池の畔で溜息を付くという選択にあてたのだ。それ以外の選択が、その日の彼にはできなかった。

「どうしたんだい、鼠さん」

鼠が振り返ると土竜が木陰の土から顔を出していた。

「いや、どうしたってわけでもないんだ。ただ、疲れてるだけさ」

鼠は土竜のいる日陰を見下ろしながら言った。

「それにしたって、随分疲れているように見えるけど、大丈夫かい？」

「大丈夫？ 大丈夫ってのはどういうことだい？」

鼠は腹立たしげに答えた。鼠、普段は優しいのだが、くたびれているのか、土竜に対して強く当たってしまう。

土竜じゃなくて青の鳥だったらなあ、鼠は思う。鼠は青の鳥のことが好きだった。青の鳥の声は鼠を癒してくれる。青の鳥は南の島の言葉で歌をうたう。唄う青の鳥の目は、どこまでも沈みこんでいくように深い緑色で、その声、その姿を鼠は愛していた。しかし、これまで青の鳥が鼠に話しかけてくれたことは一度もない。

「良いものあげようか？」

土竜が突然そんなことを言った。だが、鼠は土竜に何の期待もしていない。そっぽを向いている。

「これさえあれば全てが上手く行くんだよ」

土竜は鼠を心配するように言う。

「そんなもの、君が持ってるわけないだろ。君はめくら土竜だろ」

鼠はいよいよ腹が立ってきた。しかし、どうしてこうも腹が立つのか分からない。土竜に悪い気もするが、どうしても腹が立ってきてしまう。鼠には、土竜じゃ今の自分を救ってくれるように思われたいのだ。

「そう、めくらさ。だからこそ僕はそれを持っているんだよ」

土竜はいつもと変わらないような調子で言う。

「そんな見え透いた嘘を付いちゃいけないよ」

鼠は腹が立ちつつも、ちょっと興味が出てきていた。鼠は体を少しばかり土竜の方に向けた。

「嘘に決まっているさ」

「嘘じゃないよ」

「じゃあ、どこにあるんだい？」

「ここにあるさ。ほら、金色（こんじき）の天秤ばかりさ」

鼠は大きな溜め息をついた。腹が立つのを越えてがっかりした。何せ、土竜は何も持っていない

空の手を宙に掲げて嬉しそうに言っているのだから。しかし、土竜は鼠ががっかりしているのを見えぬとも分かっているという風が続ける。

「馬鹿にしているね。そりゃ、君には見えてないんだものね」

「見えないも何も無いものはないさ」

鼠は、怒る気にもなれず、少しでも期待した自分が馬鹿だった、寝床に戻って眠ってしまおうと、池の畔を離れようとした。土竜は鼠の腕を掴んで、

「ちょっと待ってくれよ、目を閉じてみておくれよ」

と必死に言う。

鼠は、腹も立つが、それ以上に、こんな馬鹿げたやりとりはもうごめんだと思うんだが、土竜が必死に言うのを聞いていると、不思議と目が勝手に閉じて来るのだった。

すると、鼠の真っ暗になった視界の中にぼんやりと金色に光る天秤が現れる。しかし、決して下卑たような光り方ではない。神々しい光を放っていた。夏の朝顔の新しい葉のような光だと鼠は思った。その天秤ばかりは全てが柔らかな曲面でできていた。とがった角になった部分は一切なく、全て丁寧に、それも自然で、海に近い河川敷の石ころみたいだった。

「その天秤ばかりは全てのもの全ての価値を、至極、公平にはかってくれる。迷ったらそのはかりのいうとおりに動けば、価値ある結果が得られるんだ。僕ら土竜は目が見えない上に、土の中を進む。どちらに進めば良いか。そのために僕らは金色の天秤を持っているんだ」

土竜の声が妙に遠くから聞こえるように鼠には感じられた。

神々しい光と柔らかな曲面が鼠を惹きつける。

鼠は金色に触れようと手を伸ばす。

すると、視界には外の光が戻ってきて、天秤は消え去ってしまった。

「駄目さ」

土竜が言う。もう、土竜は鼠から手を離していた。

「本当なら見せるのも駄目なのさ」

鼠は声を荒げて言った。

「おい、今の金色がお前のものだっていうのか」

その声は怒っているようにさえ響いた。

しかし、土竜は何も答えず遠くを見ているだけである。

「なあ、頼むよ。あれをくれよ。お願いだ」

鼠は、声を張り上げ頼む。土竜はやはり遠くを見ているだけだった。鼠は優しい声を出して頼んだ。鼠はすぐるように頼んだ。鼠はこれまで出したことも無いような大きな声を上げて頼んだ。鼠は涙を流しながら頼んだ。

「もう一回見せてくれるだけでも良いんだ。頼むよ」

土竜はとうとう口を開いた。

「君の目と交換だよ」

それはとても悲しそうな声だった。

かくして、鼠は視力を失い、金色の天秤ばかりを手に入れた。

半年後、土竜は死んだ。

遠くの地で死んだ。

「しかし、一体どうしてあいつは死んだんだろう」

鼠が聞く。

「どろ水だってさ」

青の鳥が言う。

鼠は、この頃、青の鳥と良い友達になっていた。金色の天秤の言うとおりにした結果、鼠は青の鳥と仲良くなれたのだった。青の鳥の声は唄っていない時もとても良いなと鼠は思っている。

「うん、どろ水。急に来たんだってさ、どっと流れて」

「それで溺れたの？」

「そうみたい。その水が、また、とっても臭かったんだってさ」

鼠は、濁った異臭放つどろ水に浮かぶ土竜の姿を考えると、気の毒に思った。しかし、同時に馬鹿だとも思った。金色の天秤さえあれば、あいつは死なずに済んだ。地を潜るもぐらは水に弱い、穴の隅々にまで水はやってくる。

「まあ、わたしも詳しくは知らないんだけど。遠くから来た渡り鳥が教えてくれて知ってるだけなの」

「どうして、あいつはそんな遠くに行っていたんだろう」

「分からないよ」

鼠は、青い鳥の羽をなでた。

その羽は、一本一本全て美しい手触りだった。

鼠は万事が上手く行く。

悩めば金色の天秤に聞く。金色は全てを教えてくれた。

目が見えずとも、何にも困らなかった。

どちらに行くほうが良いだろう、そんなことは勿論、こう踏み出しても大丈夫だろうか、段差や穴は無いだろうか、鼠がちょっとそう考えるだけで、金色は大丈夫かどうか、答えを即座に返した。

金色の天秤の傾きは目で見えるものじゃない。鼠の心の中に直接、どっちに傾いているかが流れてくるようだった。だから、鼠は走りながらも、自分の一歩がまずいかどうか分かり、まずければ修正し、また天秤に聞く、天秤は間髪入れずに答えを返す。

全ての一歩、全ての選択に対し、金色の天秤は正確に答え、鼠には失敗するということがなくなった。

時に、天秤は鼠にとって難しいこと、やりたくないこと、一見損に思えることも言った。

しかし、鼠は従った。

彼は、その金色の光に惹かれていた。その光が、鼠の選択を天秤の傾いている方に吸い寄せた

。

鼠は金色の言うことなら、どんな努力も惜しまなかった。
鼠は根は良い男だった。努力のできる男だった。

鼠の成功は続く。食に困ることはなくなった。備蓄ができた。天秤の言う通りに動いていると、ある日、不思議な糸を拾った。空気のような肌触りで、水のように触れるものを優しく包んでくれる。鼠はその糸を集め、寝床の上に敷いた。素晴らしい寝心地だった。

面白い話をする蟻の旅団と仲良くなった。蟻たちはいろんな話を教えてくれた。特に鼠は異国の神についての話が気に入った。鼠は青の鳥と一緒に蟻たちの話を聞いた。

青の鳥はいつも鼠の傍にいるようになった。鼠は青の鳥の唄を聞きながら眠る。

派手ではなかったが、鼠は、失敗でないものに包まれていた。それは、鼠にとって深い幸福だった。

その真ん中に天秤の金色の光が座っていた。

「ねえ、ねずみさん、首を吊った男の話なんてのはどうでしょう」

ある日、旅団の蟻の一匹が言った。

「お前、そんな話は面白くないだろう、やめたまえ」

旅団の別な蟻が制した。

「いや、構わないよ」

鼠は、青の鳥と、不思議な糸の寝床でくつろぎながら、蟻に向けてにこやかに笑って言った。

「ありさんたちの話は何でも面白いからね。ぜひ、聞きたいな」

「それでは、お話ししましょう」

蟻たちは、不思議な打楽器を持っている。片手で持てるほどの大きさだったが、手のひらで叩くと非常に面白い、心躍るような音の出る打楽器だった。そいつで調子を取りながら話をするというのが、蟻たちのいつものやり方で、この打楽器のおかげで、面白い話がさらに面白く、楽しく響いているのだと鼠は知っていた。

——ポコペコパコポコ、ポッポッポッポコボン——

「その大地では、たびたび、洪水が起きまして。旅などというものをしていますと、様々なものに会いまして、ねずみさんのような方や、我々と同じような旅団、一人きりの旅人。

ある日、とある一人の旅の方と一泊、アジサイの葉の下を共にしまして。旅人同士というのは話が弾みまして。旅の方は素敵な日除け眼鏡、藍色のガラスの大きな眼鏡、この人、この地は初めてと言いますから、私、洪水のことを教えてやりましたところ、参ったという顔をします。

我々は、洪水に対して笹舟というのを使います。笹舟のことは先日話しましたっけ、笹とは遙か向こうの国に生える植物で、この葉を折るだけで、絶対沈まぬ船になりまして。我々は、この笹を大量に持っております。何せ、洪水だけでなく、海を渡るにもこの葉を持っていれば事足りるわけで。逆にこの葉がないと、洪水の多い大地に行くのは非常に困難。あの大地に住んでいるものたちは、沈まない場所を知っているので、そこに暮らしますが、旅人にはそういう地も分からない。分かったところで、先に進むには沈むところも行かねばならぬ。洪水は前触れもなく起こりまして。旅人でなくとも、毎回、多くのものが死にます。沈むところに、どういうわけか作物がよく育つ、そのため、収穫の途中なんかに洪水が起きると駄目なのです。それこそ、笹を折っている暇もないほどに速く水は大地を流れてきます。洪水がひどいと、死体が浮かび上がって

、腹にガスがたまって膨らみまして、それが弾けてひどい悪臭が漂うのです。

私は、旅のものに笛を一枚やりました。そして、洪水が来まして。しかして、彼は死にました」

「なんで死んだの？」

青の鳥が聞く。

「笛があったんでしょ。笛が悪くて沈んだの？」

——ポンポン、ポッポコ——

青の鳥の言葉を待っていたかのように、蟻は打楽器を調子よく鳴らして続けた。

「いえ、笛というのは非常に優れておりまして、沈むということはありません。それに、我々がやった笛は、我々の持っているものの中でも、葉脈のしっかりした、色合いの良い、美しい、上等のやつでした。

では、なぜ。

その旅人は目が弱かったそうでして。日除け眼鏡もそのためだとか。もともとは、何も見えないほどだったのを、恩人が視力をくれた、とのこと。それでも、あまり長い間、陽の下にいと、目がいけなくなるそうでして。

せっかく笛をもらいましたが、水に浮かぶ笛の上では、太陽からは逃れられまい、再び目が見えなくなるよりは、自分は死を選ぶかもしれない、そう申しておりました」

「死んだら目が見えないよりつらいじゃない」

青の鳥が口を挟む。

——ポポンッ——

「そこは、我々には分からぬところ、目の見えなかつらさは、目の見えない経験のあるものにしか分からないのでしょうか。

その旅人が言うには、仮に目が見えなくとも不便はしない、何せ、長くそういう暮らしをしてきた。それに、見えないからこそ分かる美しいものも多い。逆に目が見えると、見えないよりも難儀なこともある。それでも、やっぱり自分は目が見えないと、どうしたって嫌なのだ。自分は目が見えるからこそ、こうして旅もできるようになった。何より、視力を与えてくれた恩人は、自分の視力を失って、代わりに旅人に視力をくれたとのこと。旅人は、その恩人というのをとても敬愛しておりました。

洪水の中、我々の笛が漂流していますと、その旅人が木から首を吊っておりました。そのときの洪水はひどくて、我々も閉口していたくらいでしたが、かの旅人の死体は、なぜだか金色に輝いて、木にぶら下がっておりまして、それはとても美しかったのです。我々の笛は、すぐに流されて行きましたので、ほんの少ししかその姿を見ることはできませんでしたが」

——ペッペッ、ポコポン……—

首吊りの話の翌日、鼠は青の鳥に金色の天秤の話をした。それは、鼠がずっと誰にも言っていなかった秘密だった。

「素敵な天秤ね。きっと心の美しいものの中にある天秤なんだね。あなたみたいにね」

青の鳥は言い、鼠は笑った。

天秤のことを青の鳥に言うことについて、天秤自身は良いとも悪いとも語らず、平衡を保っていた。

その頃、青の鳥の毛の色は、白く変わり始めていたのだが、目のない鼠にはそのことが分からない。青白い鳥。

しかし、鼠にはいつまでも美しい青の鳥。

「ねえ、金色の天秤を欲しくないかい」

鼠は時々、青の鳥に聞いた。

「別にいらないよ。わたし、あなたといればとても楽しいし、幸せだから」

鼠は、その言葉を聞くと、とても幸福だと感じた。大好きな青の鳥が自分のことをそんな風に言ってくれる。

鼠は目の見える頃と変わらず、青の鳥のことが大好きでいた。

しかし、天秤を手放して目が欲しいとも考えることもあった。

鼠は、蟻にも話した。

蟻は興味深げに聞いた。

青の鳥に話したときと違い、このことについては天秤は強く否定を示した。特に蟻に天秤を譲ろうかということを考えると、天秤は強く傾いて、否定した。

だから、鼠は、自分が持っているということは隠して、天秤の存在についてだけを話した。いや、何より鼠は、天秤が自分の近くから本当になくなってしまふのが怖くて、全ては話さなかったのだ。鼠は天秤を手放したいと思うのと同時に、天秤なしで自分は上手くやっていけるか不安だった。

蟻たちはまた旅に出ることになった。

名残惜しいが、鼠と青の鳥はそれを見送った。蟻は、話をするときを使う打楽器を一つくれた。

鼠は青の鳥が唄うのに合わせて、それを叩いた。二人は、とても気持ちの良い音にいつも包まれていた。

金色の天秤に逆らって、蟻に話をしたせいで鼠は危険に遭うことになる。

蟻は、いろんな地でいろんな話をするのが仕事だった。金色の天秤の話もした。蟻は鼠がそれを持っているということは語らなかったが、勘違いしたのか、聞き間違えたのか、鼠が金色の天

秤を持っていると思っ込んだものがやってくることになる。

初めに来たのは、賢い象だった。

鼠が、自分は天秤を持っていない、話が少しばかりずれて、象さんが勘違いしてしまったのだと説明すると、象は急にやって来て、譲ってくれなどと、失礼なことをしたと丁寧に謝った。

鼠と青の鳥は、象のことを失礼なやつだ、などとは思わなかった。

象は、しばらく鼠たちと暮らした。

鼠と青の鳥は、象の上に乗って、いろんなところへといった。鼠には目が見えずとも、巨大な象の上にいるのは、とても気持ちの良いことだった。巨体の作る一步一步の揺れ、それは、鼠も青の鳥も経験どころか、想像すらしたことの無い心地の良いものだった。地面と自分たちが逆転してしまっ、大きな地面を自分たちが支えている、そんな風に鼠は思った。

しかし、困ったこともあった。象の食事はとても多く、それを鼠がほとんど一人で探して手に入れなければならなかった。象は見知らぬ土地で、どこに食べ物があるか知らない。象の食事を手に入れるのは、金色の天秤が導くようにすれば不可能なことではなかったが、代わりに鼠の体は毎日へとへとに疲れなくちゃならなかった。

「ねえ、申し訳ないから、僕は帰ろうと思うんだ」

「いや、良いんだよ。君は友だちじゃないか。気にすることは無いんだよ。それに、最近じゃ、この土地にも慣れて、自分でも結構取れるようになってきたじゃないか。僕らきっと上手くやっていけるさ」

「でも、やっぱり悪いよ」

象は賢かったので、鼠が日々、疲れていっているのが分かった。そして、それを続けるのが無理だということも。青の鳥も象のことは好きだったけど、

「ねえ、象さんも、自分の住んでいたところが恋しいんだよ。また会いたくなったら、会いに行けばいいじゃない」

と象が去ることに賛成した。

金色の天秤も、象を引き止めるという鼠の選択に反対していた。

鼠は、象を見送ることにした。とても、悲しかったけれども。青の鳥も、象がいなくなるのは寂しいと思った。

象は、別れ際に「ジャイアントステップ、という地面の踏み方を教えてくれた。「ジャイアントステップ、をすると、象の上で感じたみたいに、地面の感触を素敵に感じる」ことができた。

鼠と青の鳥は、「ジャイアントステップ、を踏みながら、蟻の打楽器をたたき、うたを唄って過ごした。

みるみる鼠は元気を取り戻した。

次に来たのは、煙草だった。

煙草は、鼠が金色の天秤を持ってないと知ると、

「チッ、遠くから来たのに、完全なる無駄足だったのか。こいつは天秤と交換しようと思って持って来たのに、クソッ」

と毒づいて、帰っていった。嫌なやつだと、鼠も青の鳥も思った。

でも、煙草は交換するつもりで持って来たコーヒー豆を、持って帰るのも邪魔だし、せっかくだからと言って、鼠たちにくれた。

でも、天秤はそれを飲むべきじゃないといった。

鼠と青の鳥は、それを巢の中に置いたまま飲まずに放っておいた。

少ししてから、不思議な良いにおいが、鼠と青の鳥の寝床を包むようになった。

愛想は悪かったが、実は良いやつだったのかもしれない、と鼠と青の鳥は思うようになった。

その頃、実は青の鳥は、もはやほとんど全ての羽が白くなってしまっていた。でも、鼠は美しい青の鳥を思っていた。

鼠も随分変わっていた。

二人は年を取っていた。

鼠は、やっぱり天秤の言う通りに生きていた。

三番目の来訪者こそが危険だった。

イナゴの集団だった。

彼らは強力な散弾銃を持っていて、鼠を殺し金色の天秤を奪おうと狙っていた。

晴れた日で、鼠は外に行こうとしていた。青の鳥が、流行っていた感冒で床に伏していた。鼠は青の鳥のために薬草を探しに行こうとしていた。

青の鳥の調子は悪かった。あの美しい声も上手く出なかった。薬の草は絶対に必要だった。

しかし、その日、鼠が薬の草を探しに行こうとするのを金色の天秤は否定した。

これまでに、天秤は何度か鼠の意に反することを言うことはあった。しかし、鼠は金色の美しい光を感じていると、天秤の言うことを聞こうと思ってしまうのだ。

しかし、この日の鼠は、いよいよ天秤の言うことを聞かなかった。どんなに天秤が美しい金色の光を放っても、鼠は断固として天秤を無視した。鼠が巣を出て、薬の草を探している間も天秤は巣に戻るように光り続けた。それは、ずっと所有し続けていた鼠ですら見たことのないほど美しい光だった。しかし、鼠は前に進んだ。青の鳥のためには薬の草が必要なのだ。

次の瞬間、弾ける音が鼠の周りから響いて、鼠は体中にひどい痛みを感じて、そのまま倒れると、ぴくりとも動けなくなってしまった。

「おい、こいつ、天秤なんて持ってないよ」

イナゴたちの声だった。散弾銃を肩に担いで、イナゴたちが鼠の周りを探っていた。しかし、鼠には、もう何も分からない。真っ暗で、ただ冷たくって、ああ、早く薬の草を見つけなきゃ、ただそう思うばかり。

「こいつの巣に行ってみよう」

あるイナゴが言った。その声だけが、鼠にも分かった。

全てのイナゴが賛成した。

イナゴたちは鼠の巣を探しに出発した。すぐに見つかってしまうだろう。

しかし、一匹だけ、鼠のもとに残った。実は、鼠のやつめ、どこかに隠し持っているんじゃないか、そう考え、残っていたのだ。

そのイナゴが、天秤を探そうと、鼠の手を握った。

その瞬間、鼠から金色の天秤は消えて、イナゴへと移ってしまった。

代わりに、鼠は、自分の目が見えるようになっているのが分かった。

久し振りの目が見える世界。鼠の前にあったのは大量の血、それは自分の体にあいたたくさんの穴から一斉に流れ出ていた。そして、目を押さえてうずくまるイナゴ。

そして、池と土竜だった。鼠がかつて視力と金色の天秤を交換した場所だった。そして、なぜか、池のほとりにあの頃と全く同じように土竜がいた。ただ、鼠だけが年を取り、体中から血を流していた。

「ねずみさん、どうしたんだい。何か困ったことがあるのかい。いや、さすがに今回は聞かなくても分かるね。君は今にも死にそうだし、そして、青の鳥もね」

鼠は体が動かない、声すら出ない。

「ねえ、二つ選択肢を出すよ」

土竜は遠くを見ながら言った。

「一つは、時間を巻いてあげるよ。巣から出る前にね。そして、君は、今日は巣から出ない。青の鳥は助からないかもしれない。もう一つは、君はこのまま巣まで這って行く。僕が後ろからついて行ってあげるよ。そして、イナゴをみんなやっつけてやる。ただ、君は死んでしまうだろうし、葉の草はないから、いずれ青の鳥も死んでしまうだろうね」

鼠は、土竜の言葉が終わり切らない内から巣に向けて這い始めていた。土竜はとても悲しい目をして、鼠に言う。

「ねえ、きっと金色の天秤があったらきっと時間を巻けて言うよ。だって、僕は目が見えないあの頃の土竜なんだよ。君の後ろを上手くついて行けるかすら分かりゃしない。それに、君もそんな体じゃ、巣まで辿り着けるかも分からない。そうだろ」

しかし、鼠は這うのをやめない。

鼠は一步一步をしっかりと進めて行った。その一步一步は、象から教えてもらった「ジャイアントステップ」だった。わずかずつだが、確実に鼠は進んだ。その揺れで、腰につけたままにしていた、蟻からもらった打楽器が、ポコンポコン、と鳴った。とても澄んだ音がゆっくりと、はっきりと、鳴り響いた。

土竜は涙を流していた。土竜は目が見えなかったが、わきでうずくまっていたイナゴから手探りで散弾銃を奪うと、ポコンポコン、と響く澄んだ音について行った。鼠の血が土竜の足にまとわりついた。

鼠は、もう声も出なかったけど、確実に進み続けた。段々と、目も霞んできた。その時、ふと珈琲豆の香りがするのを感じた。鼠は自分の寝床が近いことを知った。鼠は力を振り絞って前に進んだ。

鼠と土竜が巣に着いた時、ちょうどイナゴたちが青の鳥に散弾銃を向けようとしているところだった。

もぐらは、いつも鳥が唄う時に使う南の国の言葉で、

「伏せろ」

と叫んで、文字通り、めくら滅法に散弾銃をぶっ放した。

散弾銃は上手くイナゴたちだけを貫いた。イナゴたちはみな倒れた。

青の鳥が鼠の駆け寄った時には、土竜の姿はなかった。鼠自身がしっかりと散弾銃を抱えたまま、血がすっかり抜けて、軽く、冷たくなった体で転がっているだけだった。

鼠の顔を持ち上げて、青の鳥は唄った。鼠が一番気に入っていた唄。

鼠の目がうっすら開く。

そこには、確かに、白じゃない、青い鳥がいた。

鼠の幻覚ではない。確かに、少し前まで鳥の毛は年を取り、白くなってしまっていた。しかし、病気のせいで、深い青い羽に再び戻っていた。それでも、やはり年を取っているのには違いない。しかし、昔の鼠には分からなかった美しさが、そこにはあった。

「君こそが僕の金色の天秤だったんだね」

鼠は言った。

青の鳥は鳴きながら唄った。泣きながら唄う声は、普段の美しい声とは全く違った。はたから聞いていると、ひどい歌声だったかもしれない。

「あなたもわたしの金色天秤、わたしもあなたの金色天秤」

馬鹿の一つ覚えのように、青の鳥は繰り返して唄った。いつもの南国の言葉でなく、鼠と鳥の生まれた地の言葉で。

——ここまでは我が旅団の知ってる話。

ここから先は本当かどうかは知りませぬ、私が勝手に作ったお話。

死んだ鼠の体には、草がついていた。ちょっと都合は良いけれども、これが薬の草でして。

鳥は鼠が死んでからも、その体にうつ伏せて泣き続けまして。

これがよかった。

涙が薬の草に溶けて、鳥の体に染み渡り、流行の感冒は治りまして。

そうは言っても鳥も随分と年老いていたから、決して長い命ではなかったにせよ、ちゃんと病気は治って、しばらくの間、元気に過ごしました。

ええ、作ったお話ですから、本当かどうかは分かりませぬ。

けど、とある大地では今でも青い鳥が美しい声で鳴いていて、その声が「コンジキテンビン」と聞こえるそうなの。

さて、これにてお話は終わり。

僕はまた旅に出なくちゃ。

僕にとってこの話を最後まで聞いてくれた君は、間違いなく僕の金色天秤。

——ポンポンポコポコペッコポン……。

(了)

最後までお読みいただきありがとうございました。
よろしければ、ご感想、コメントいただけると嬉しく思います。

金色天秤

<http://p.booklog.jp/book/23275>

著者：福田鼠

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tyorori/profile>

発行所：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/23275>

メールでのご感想はこちらへ

doronezumi@gmail.com

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/23275>